（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　新村　容子

論文題目　アヘン貿易論争―イギリスと中国―

本論文は、1830年代より1890年代にかけ、イギリスと中国の双方のアヘン貿易に関する論争と対応策を克明に考察し、中国国内産アヘンが広範に栽培されるに至った過程を研究史上初めて明らかにした力作である。そこでは、アヘン問題は単に輸入貿易のみに止まらず、清末の財政と国内市場構造に大きな影響を及ぼしたことが論ぜられている。19世紀のイギリスにおけるアヘン貿易をめぐる論争に関して、当時のイギリス人のアヘン貿易に関する言説の検討を通じて、イギリスには、「人間は人種によって根本的に異なるという認識が根強く広まっており、アヘンは東洋人の体質に適合した嗜好品である」という認識が社会的に受け入れられていたことなど、興味深い東洋人像に注目しつつ、1870年代からフレンド教徒や福音主義諸派などの非国教徒からの批判が高まり、1874年には「アヘン貿易反対協会」が結成される過程が追跡される。さらに、アヘン貿易が、インドからイギリスへの送金を実現する機能を果たしていたことを分析し、それは同時に、中国市場においてアヘンを支払い手段とする多角的決済を実現させ、インドアヘンを茶や棉花の購買に充当してイギリス本国に送る役割を果たしていたという市場構造の全体像が論ぜられる。他方、中国側においては、銀の流出という危機意識が強まるなかで、従来注目されてこなかった議論すなわち、中国アヘンの生産を奨励し輸入アヘンに代替させてアヘンの輸入を止めるという弛禁論が影響力をもったことを明らかにし、アヘン戦争後、建前は禁止、裏では黙認ないし奨励という清朝中央政府および地方政府の政策のもとに、生産が拡大されていった過程を明らかにした。その後、アヘン生産を税収獲得のための重要な手段とみなすに至り、地方官僚との間に大きな亀裂を生み出すことになった点も明らかにしている。

今後の課題として、筆者も述べるように、輸入アヘンならびに国内アヘンの販売のネットワークにおける中国人商人の役割と位置はどのようなものであったか、また、インドにおける生産・流通はどのようなものであったか、などの点が挙げられる。しかし、このテーマは、全く新たな資料的・方法的準備のもとに、稿を改めて検討すべきであり、本論文において明らかにされたイギリスと中国のアヘン論争に関する議論をいささかもそこなうものではないと考える。本委員会は、上記のような画期的な成果をあげていることに鑑み、本論文が博士（文学）の学位に十分に相当するものであると判断する。